

第2部

2. 方法論と現実世界

ぼくが20歳から30歳代前半にかけて掲げた旗印は、「自由と科学的認識」でした。まさに、西欧近代主義の基盤をなす部分でもあります。ぼくがこの旗印を得たのは、前にも述べましたが、高校時代を過ごした学校の風土と、大学を卒業するまでに理科系の学問を深く学んだことによるものです。その頃にぼくの意識の中に強く反映していた弁証法と唯物論もその一翼を担っていたと思います。

その頃のぼくの口癖は、「物理的に有り得ないことはできるはずがない」でした。この言葉は、前述の旗印を背にして考動することから発しただけではなく、科学的知識と論理的思考から判断して有り得ないと思われることを、無理に押し付けてくる人たちへの反発も含まれていました。

この旗印を掲げて、ぼくは多くの知識や多くの現場に触れる経験を積み重ねました。その過程でぼくの考動は少しずつ変化してきたようです。“物理的に有り得ないこと”に対する態度に疑問が湧いてきたのです。

何を基準に有り得ないと判断できるのかが、自分の中で明確になっていなかったのもその一つの理由だったでしょう。科学的認識の可否は一つの基準になり得ますが、科学の歴史をたどってみますと、科学の発展とは、それまでは有り得ないと受け止められてきたことが実は有り得るのだという発見の積み重ねなのです。

そういった発見は、目前に起っている現象や自然現象の緻密な観察を通して、従来から言われていることに違和感を感じることを出発点としています。そこから先は想像力や創造力、そして独創力が活躍する場です。

“物理的に有り得ないこと”として拒絶することは、想像力や創造力、そして独創力を封じ込めることになるだろうという想いが、疑問の根底にあったと思います。“物理的に有り得ないこと”として拒絶することは、科学的認識を旗に掲げる者として相応しくない態度だということが、諸々の思考や行動を通して無意識の領域に沈澱していったのだと思います。

こうしてぼくの中に根付いていったのは、“物理的に有り得ないこと”など存在しない、有り得ないと思えることは“科学的認識の領域に未だ達していないこと”なのだ、という考えでした。そして、そういう考えの下にこそ新たな発見が生まれ、新たな思想や理論が

生まれてくると思うようになったのです。

“物理的に有り得ないこと”として拒絶したぼくの考動は、「自分が明証的に真であると認める」のでなければ、どんなことも真として受け入れないと宣言したデカルトの二番煎じと言えるほど類似しています。これは、後に説明する普遍的無意識の具象化によるものかもしれません。

この宣言を起点として動き出したデカルトは、その後の経験から、そして後に示すように多くの実験から、真理に近づく方法論を確立していくのですが、ぼくは自分が拒絶したことを“科学的認識の領域に未だ達していないこと”と認識し直すくらいが精一杯だったという訳です。

デカルトの思考のスタートは旧教軍の冬営地の炉部屋だったのですが、その思考の行き着く先は理性を全面的に前面に浮かび上がらせるものでした。気を散らすことなく心ゆくまで思索にふけた結果ですから、それは当然の成り行きだったのでしょう。

もし、凄惨で苛酷な戦闘に巻き込まれていたなら、生身の人間存在に触れる機会が多くなって、違ったゴールに到達していたかもしれません。しかし、それを想像することはできても見ることはできません。

ぼくは大岡昇平氏の「レイテ戦記」を少しずつ齧りながら読みましたが、いわゆる歴史書で語られる戦争とは全く違ったものが迫ってきます。一人一人の兵士の姿が浮かんできますし、死ぬ運命を察した兵士たちと将校たちの行動や、心の有り様が見える感じがするのです。

デカルトがそんな戦場経験をしたのかどうか、その著書から読み取ることはできません。恐らく、冬営地の炉部屋での思索の内容をさらに深く掘り下げるために、気を散らしたり周囲に引きずられたりすることを避けて、フランスからオランダに移ったのでしょう。でも、死ぬ運命を察した兵士たちで溢れる戦場経験を彼が持ったとしたら、そこで彼が何を考え、そこから何を引き出すことになったのか、覗いてみたい気がします。

デカルトは自分の生み出した方法論を他者に押し付けようとはしませんでした。あくまでも自分自身の思想改革のための方法であり、自分自身がその方法を用いて事を進めていくプロセスを公表し、多くの人たちに見てもらえるようにすることまでしか考えていませんでした。

その方法論の前提は、その時まで受け入れ信じてきた諸見解のすべてに対して、自分の信念から一度きっぱりと取り除いてみることであり、そして、自分が明証的に真であると認める

のでなければ、どんなことも真として受け入れないことでした。

また、その方法論の軸となるものは、人間が認識しうる全ての事柄は、1つのことから他のことを演繹するのに必要な順序をつねに守りさえすれば、どんなに遠く離れたものにも結局は到達できるし、どんなに隠れたものでも発見できるという、演繹の力に最大の確信を持ち、これを徹底して励行することでした。

自分が受け入れ信じてきた諸見解をすべて、自分の信念から一度きっぱりと取り除いてみる、という表現は、それらの諸見解の影響から完全に解放されるように見えますが、そうではないはずです。一度でも触れた見解は、明証的に真であるかどうかを判断する自分の考動を左右する重要な一要素になるはずなのです。

第1部で述べたことの一部を繰り返してみます。デカルトが言うように「正しく判断し、真と偽を区別する能力」は、全ての人に生まれつき平等に具わっているようです。彼はその能力を、良識とか理性、という呼び方をしています。

理性という言葉で表現される内容は結構明確ですが、良識という表現を使いますと内容が曖昧になります。彼の著書「方法序説」のある翻訳書の訳注には、「良識」を次のように説明しています。

*良識 bon sens もともと「正しい分別 sens」を意味する。「真偽を判断する能力」と定義され、「理性」と同義。後述の「自然（生まれながら）の光」にもつながる。
なお、ラテン語 bona mens に由来する、「知恵」sagesse を意味することもある。

こうしてみると、彼の中では良識は理性とほぼ同じものと捉えられていたと言えます。

そこで、考えてみたいことが一つ浮かんできます。全ての人に生まれつき平等に具わっている「正しく判断し、真と偽を区別する能力」とは、理性だけから生まれてくるのだろうかということです。

ぼくはユングの心理学を独学で学びました。特に、社会的歴史的な側面から究めていく心理学に強い関心を持ちました。人間の心には、意識の領域を圧倒的に超える大きさの無意識の領域が存在すること、人間考動は無意識の領域に支配される側面が大きいこと、などは、腹に落ちるものでした。

現実の仕事や活動や生活の中でそんな学びを重ねて行き着いたのが一つの文明論でした。それは、「内的沈澱と外的具象化」論です。次のような所論を公開しています。

文明と文化はどう違うのか、という問いが発せられる時、多くの人々は心の中にそれに対する解答を持ち合わせているであろう。しかし、言葉の上で定義しようとするとは適切に答えられない人が多いのではなかろうか。

文明と文化をその反対語らしきものと合わせて思い浮かべてみよう。厳密に考えずに心象レベルでよい。文明の反対語は野生とか野蛮とかであろう。文化の反対語は自然とか天然ということになるろう。

文明にも文化にも人間が関係している。そして、自然という言葉には文化という言葉のイメージが常につきまとう。ということは、自然という言葉は文化の反対語としては相応しくないであろう。

反対語らしきもので考えてみる時、野生には人間の匂いがするが天然には人間との関係を断ち切っているイメージが強い。この切り口から文明と文化の違いが見えてきて、文明の定義に近付くことができそうである。

私たちがこれまで学んできた歴史とは文明を対象としている。有史以来という言葉は文明の発生以来という表現に置き換えることができる。しかも、この歴史過程の中には文化が顔を覗かせることもある。

そうではあっても、やはり歴史の本流は文明の流れなのである。私たちの“歴史”として現れる現象は文明が“分明”であることを語っている。

即ち、未分化なるものを知によって分化していく過程を文明の発展と呼ぶことができる。丸山圭三郎先生の言葉を勝手に借用させて頂いてよいのであれば、言分け（ことわけ）の過程が文明の発展過程と言えるだろう。

人間は何をどのようにして言分けるのであろうか。未分化なるものとは一体何なのであろうか。これを解く鍵がソシユールの言語学とかユングの心理学とかの中に在ると私は考える。

地球上に発生したままの人間は野生そのものであり、文明のかけらも持っていなかったであろう。そんな人間にどのようにして文明が発生したのか。これを考えることは実に興味深く楽しいものだ。

人間も他の動物も、同じように知覚能力と反応器官を与えられたにもかかわらず、何故

人間だけが野生の中から文明を生み出したのであろうか。ここで再び丸山圭三郎先生の言葉を勝手に借用させて頂きたくなる。

知覚と反応器官により、未分化なるものを分化していくことを身分け（みわけ）と呼ぶことができるだろう。即ち発生したままの人間や動物が外的世界の中で行っているのは身分けなのである。身分けからは文明は生まれないであろう。文明の発生の根源は人間のみが与えられた言分け能力にあるのであろう。

言分け能力とは一体何か。言分けとは、その行為に内的な世界が絡む。その内的な世界こそが言語の発生の根源である。言語学の成果によれば、言語の発生の根源は無意識の領域に在る。そして、無意識の領域の中に在るものは未分化なものである。

未分化なものが分化されるとは、無意識の領域に在るものが意識の領域に現れるということだ。天は人間にのみ無意識の領域と意識の領域との間を往来できる通路を与えたのである。これが言分け能力の源である。

ユングによる無意識の研究成果は、私たちに無意識の領域に在るものの形成のされ方を教える。彼の研究成果は無意識の領域の3種類の在り方を示す。

その第一は、種や群に先天的に与えられるものとしての普遍的無意識、その第二は、種や群が世代を重ねていく過程で生成されるという集団的無意識、そして、その第三は、個が個の経験の中で沈澱させるものとしての個人的無意識である。

発生したままの人間の無意識の領域には、先天的に与えられる普遍的無意識のみが在ったのであろう。それは人間という種が外的世界の中で生きていく上で、必要最小限の内容がプログラムされたものだったのであろう。

これを否定したら人間の発生そのものが有り得ないことになってしまうと私は考えている。

私の思考の到達点は次の通りである。

「文明とは無意識の領域に沈澱している内的なものが外的に具象化した結果であり、野生とは外的なものが無意識の領域に内的に沈澱したものと先天的に与えられたものとの総合である」

文明と野生とは、外的具象化と内的沈澱とで構成される環の上で相互転換を繰り返す。この相互転換は弁証法的運動そのものであり、螺旋状の運動である。

以上のような文明の見方から文化を定義することができる。文化とは、相互転換の環の上で運動する文明と野生との共存状態のことを指す。従って文化とは、文明も野生をも包含した概念であり、人間の存在が関わっている限り如何に野性的であろうと野蛮であろうと、そこには文化が存在しているのである。

文化の反対語らしきものとして天然がイメージされるということは、天然という言葉の示すものが全く人間に関わっていないという印象を与えることによるのであろう。

人間がありのままに存在することを自然という言葉で表現することがあるが、それはそれで妥当な意味を持っていると言えるだろう。ただ、その時に使う言葉はあくまでも“自然”であり“天然”ではない。

こうした文明論の立場から見ますと、一度でも触れた見解は何らかの内的沈澱を生み、自分の考動を左右する重要な一要素とならざるをえないと受け止めることができます。即ち、自分が意識するか否かに拘わらず、自分の考動に影響を与えざるをえないのです。

そういう見方をすれば、「自分が明証的に真であると認める」という考動は、その時までに受け入れ信じてきた諸見解で、自分の信念から一度きっぱりと取り除いたと信じているものから影響を受けているのです。そして、それで良いのです。

全く何も知らない状態で、ある事柄を「明証的に真であると認める」ことと、多くのことを知りそれらの知識や情報に対して何らかの感覚や思いを持って、ある事柄を「明証的に真であると認める」こととの間には大きな違いが生じます。そして恐らく後者のほうが、より真理に近いのだらうと考えられます。

デカルトは演繹を重視しています。真理だと確信できる何らかの事柄からスタートして必要な順序を守って演繹を重ねることによって、人間が認識しうる全ての事柄を見い出すことができると言っています。その通りだと思います。しかし、現実の世界における現れ方は必ずしもそのような思考の一本道を進んでいく訳ではありません。

人間は知覚を持っています。思考の過程においても知覚は働いています。即ち、真理か否かについて考えるべき事柄は、次から次へと感知され続けることになります。感知されたことが、既に真理だと確信された事柄から演繹されると判明することもあります。

また、感知されたことが、それまでに把握された事柄だけではつながらなかった演繹的思考をつなぐ役割を果たすこともあります。このように、演繹的思考は知覚の助けを得て

つながっていくと考えるほうが現実合っていると言えるのです。

同時に人間は周囲や環境に働きかけるという行為を行います。この行為は知覚能力を具えた主体に感じ取られ、その反応を引き出します。そしてその反応は、働きかけられた周囲や環境が引き起こす事柄として、働きかけた人間に知覚されることになります。自分が働きかけることによって知覚される事柄もまた、上述のような在り方で演繹的思考を助けると言えるのです。

これが現実の世界における人間存在の在り方なのです。人間は思惟することだけではなく、感知したり働きかけたりすることも合わせて存在の基盤を作っているのです。デカルトがその点を強く表現していないことに、ぼくは若干の違和感を持っています。

方法序説の第2部の結びには、デカルトがこうした真理の探究の中で、おのれの哲学の貧困を感じますが、その哲学の原理の探究は多くの経験を積んでからにしようと決めたことが語られています。その他の部分にも、その類のことが語られています。

こうした方法序説の文脈からは、デカルトが理性を強調する中でも経験をかなり重要視していたことが読み取れます。理性に軸足を置きながらも、感知と働きかけから得られるものを思考のプロセスに取り入れていたであろうデカルトの姿を、そんなところから感じ取ることができるような気がしています。

ぼくが持っているデカルト像は、世間一般に伝えられているデカルト像とは違うもののような気がします。